2012年発行
『別府大学大学院紀要』第14号　抜刷

慶長５年６月～同年９月における徳川家康の軍事行動について（その２）

白　峰　　旬

【論　　文】

慶長５年６月～同年９月における徳川家康の軍事行動について（その２）

白　峰　　旬

【要　　旨】

慶長５年９月15日の関ヶ原の戦いに至る政治的・軍事的動向を把握するうえで、同年６月～９月における徳川家康の軍事行動について検討することは重要であり、必要不可欠な考察であると言えよう。本稿では、当該期に家康が発給した多くの書状を中心にその内容分析をおこない、昨年（2011年）３月に刊行された『愛知県史』資料編13、織豊３の所収史料など新出史料の分析もおこない、新知見を得ることを目指すものである。

【キーワード】

関ヶ原の戦い、徳川家康、上杉討伐、岐阜城攻城戦、大坂城受け取り

※拙稿「慶長５年６月～同年９月における徳川家康の軍事行動について（その１）」（『別府大学紀要』53号、別府大学会、2012年）より続く。

４．尾張国内で対峙する両大軍

８月上旬から下旬における両軍（家康方の軍勢と石田三成方の軍勢）の尾張・美濃・伊勢国内での集結状況（軍事的動向を含む）をまとめると、以下のようになる。

【石田三成方の軍勢】

①８月４日…吉川広家は伊勢へ出陣することになり、８月中は伊勢に逗留予定である[95]。

②８月５日…石田三成が織田秀信と相談して尾州表へ人数を出すことになった。福島正則を説得中であり、説得に成功すれば三州表へ出陣する予定。もし説得に失敗すれば、清須城（福島正則の居城）を勢州口の（石田三成方である毛利家の軍勢と）一緒になって攻撃する予定である[96]。

③８月８日…石田三成は、尾・濃境目の仕置のために、尾州表へ出陣した。岐阜衆（＝織田秀信）と相談することにしている。九州衆（＝九州の諸大名）は佐和山城に人数が必要になり次第に、兵を出す予定である[97]。

④８月10日…石田三成は大垣城に在城していた[98]。

⑤８月13日…石田三成は、尾張国内の曼陀羅寺に対して、５ケ条の禁制を出した[99]。
⑥８月17日…奉行中の下知により、島津義弘が濃州の垂井に着陣した。この時点で、島津義弘の軍勢は1000人以内であった[100]。
⑦８月19日…宇喜多秀家の重臣である明石守重は、伊勢表の仕置等のために、清須の近くに在陣していた。明石守重は、10日以前から（つまり、８月９日以前から）、清須の近くに在陣していた[101]。
⑧８月19日…宇喜多秀家は、伏見落城（８月１日）のあと大坂へ下り、この頃（＝８月19日頃）は草津表に出て在陣していた[102]。
⑨８月20日…長宗我部盛親は5000人を召し連れて（軍役規定は2000人）、近日、勢州へ着陣する予定である[103]。
⑩８月20日…立花宗茂は4000人を召し連れて（軍役規定は1300人）、この日（８月20日）垂井に上着する予定である[104]。
⑪８月27日…石田三成・小西行長・島津義弘・宇喜多秀家は連署して、林村（現岐阜県大垣市林町）に対して禁制を出した[105]。よって、８月27日の時点で、石田三成・小西行長・島津義弘・宇喜多秀家は大垣城に在城していたと考えられる。

こうした動向をまとめると、８月上旬には石田三成方の軍勢が尾張国内に出陣して（８月８日）、三成が大垣城に在城する（８月10日）など、家康方の軍勢よりも早い時期に尾張・美濃方面で軍事行動をおこしていることがわかる。８月中旬には、島津義弘が美濃の垂井に着陣し（８月17日）、同月下旬には立花宗茂も垂井へ着陣予定であった（８月20日）。ただし、実際には、立花宗茂はその後、大津城攻城戦のため関ヶ原方面には出陣していない。８月下旬には石田三成・小西行長・島津義弘・宇喜多秀家の四将が大垣城（美濃国）に在城していた（８月27日）と考えられるので、８月下旬には、家康方の軍勢と決戦するための兵力集中が大垣城を拠点城郭として完了したことになる。

【家康方の軍勢】
①８月５日…８月５日付で家康は福島正則・徳永寿昌に対して、一刻も（早く）その道筋をあけるように指示している[106]。よって、この時点で福島正則は居城の清須城に在城していたと考えられる。そして、徳永寿昌も、この時点で福島正則とともに清須城に在城していたと考えられる。上述のように、８月５日付石田三成書状で石田三成が福島正則を説得中であると報じたことは、この時点で、福島正則が居城の清須城に在城していたことを示す傍証になる。
②８月８日…８月８日付で本多正純は黒田長政に対して、井伊直政は病気のため本多忠勝を清須まで遣わすので、よく相談するように指示した[107]。しかし、井伊直政は病気のために遣わされない、としているが、上述のように、８月12日付で家康は井伊直政・本多忠勝に対して、敵方が籠城している犬山城への対応を指示しているので、実際には井伊直政は本多忠勝とともに尾張国へ遣わされたことがわかる。
③８月12日…８月12日付で家康は井伊直政・本多忠勝に対して、（石田三成方として）加藤貞泰は犬山城に在城しているので、福島正則と相談してしかるべきように対処するよ

う指示した[108]。よって、この時点で、井伊直政・本多忠勝は犬山城の近くに在陣していたと考えられる。前掲・中村孝也『徳川家康文書の研究』中巻（571頁）の解説では、この時点で井伊直政・本多忠勝は清須城に在城していた、としているが、８月18日付戸川達安書状[109]、８月19日付黒田長政・徳永寿昌・奥平貞治連署状[110]の記載内容によれば、８月18日～同月19日の時点で井伊直政・本多忠勝は、まだ清須に着いていなかったことがわかる。

④８月13日…８月13日付で黒田如水は、黒田長政が今日（＝８月13日）・明日（＝８月14日）に清須へ行く予定である、と報じている[111]。よって、黒田長政は８月13日、或いは、同月14日に清須城へ到着予定であったことがわかる。

⑤８月16日…この時点で、西尾光教は福島正則とともに清須城に在城していた[112]。

⑥８月16日…８月16日付で家康は細川忠興・黒田長政・藤堂高虎に対して、福島正則からの注進状を披見した、としたうえで、「其元」では万事油断なく福島正則と相談するように指示している[113]。よって、この時点で細川忠興・黒田長政・藤堂高虎は、福島正則とともに清須城に在城していたことがわかる。

⑦８月18日…家康方の戸川達安は清須まで西上していた[114]。

⑧８月18日…家康方の軍勢は諸勢が清須辺りに在陣している。井伊直政・本多忠勝・松平忠吉そのほか先手衆が一両日中（＝８月18日から１、２日後）に清須辺りに着陣する予定である。石川康通・松平家清は先勢として急いで（すでに）清須へ着いた。家康は去る８月16日に江戸を立ち、同月25、26日には必ず清須に着く予定である[115]。これらの点を勘案すると、８月18日の時点で家康方の軍勢は清須辺りに集結しており、１、２日後には井伊直政・本多忠勝・松平忠吉なども清須辺りに着陣予定であったことがわかる。なお、家康が８月16日に江戸を出馬した、というのは結果的には事実ではなく虚報であったことになる。石田康通と松平家清は清須城の番手であったため（表３参照）、先に清須へ着いた、と考えられる。

⑨８月22日…上方への路次（＝道筋）の城々は、清須城を初めとして諸城へ家康方より番勢（＝守備の軍勢）を入れた。この時点で、遠江・三河・駿河の人数はすべて尾州に着陣した[116]。このことから、８月22日の時点で、遠江（堀尾忠氏、山内一豊、有馬豊氏、松下重綱）・三河（池田輝政、田中吉政・同吉次）・駿河（中村一栄）の軍勢はすべて尾張国内に着陣していたことがわかる。こうした動向をまとめると、８月上旬の段階では、家康とともに東下した諸大名の中で、福島正則など家康の命により他大名よりもいち早く西上した一部の大名のみが尾張国内に在陣しているだけであった（８月５日）。この時の家康方の最前線の城郭は、福島正則の居城である清須城であった。その後に西上した諸将の中で、黒田長政は８月13日、或いは、同月14日に清須城へ到着予定であり、細川忠興・黒田長政・藤堂高虎は８月中旬の段階では清須城に在城していた（８月16日）。そして、井伊直政・本多忠勝・松平忠吉など徳川の軍勢が少し遅れて清須辺りに着陣予定であり（８月18日から１、２日後）、８月22日の時点では、池田輝政・堀尾忠氏・山内一豊など東海道筋の諸大名が尾張国内に着陣を完了していたことがわかる。

こうして８月下旬には家康方の軍勢は清須城（尾張国）を中心として展開し、兵力集中が完了したことになる（８月19日～同月22日）。

このように、家康の軍勢は、黒田長政・藤堂高虎など西国の遠隔地に所領がありながらも家康に与同した遠国外様グループ、福島正則・池田輝政・堀尾忠氏・山内一豊など東海道筋（駿河国・遠江国・三河国・尾張国）に居城があり家康に与同した東海道外様グループ、井伊直政・本多忠勝・松平忠吉など関東に居城がある徳川グループというように３つのグループから構成されていたことがわかる。

この中で、遠国外様グループと東海道外様グループの諸大名は、この段階では家康と封建的主従関係が成立しておらず、本来は豊臣系大名（豊臣秀吉がこれらの大名の居城地への移封を命じた）であるため、あくまで家康に対して自主的に与同したことになる。

以上のように、８月下旬の段階で、両軍は大垣城（石田三成方の軍勢）、清須城（家康方の軍勢）をそれぞれ拠点として兵力集中を完了し、決戦が近いことを思わせる状況になった。

８月20日付で、島津義弘は本田正親に対して、①関東と京都の「御弓箭」（＝戦い）であるので、尾州と濃州の堺を隔てて防戦することになるだろう、②最近、家康の御供をして東国へ下向した「上方之人数」と井伊直政・榊原康政（実際には、本多忠勝が正しい）が「東国之人数」を引率して、尾州清須へ至り上着した、という報告があったので、きっと近々一戦に及ぶであろう、と報じている[117]。この島津義弘の今後の決戦地に関する予想はほぼ正確であったことがわかり、上杉討伐のため家康に従って東下した諸大名の軍勢と、家康から遣わされた井伊直政など（榊原康政については誤認であり、本多忠勝と取り違えている）が最近清須へ着陣したことについては、正確に敵状を把握していたことがわかる。そして、こうした近距離における敵の兵力集中を看取して、近々一戦に及ぶと予測している。

このように島津義弘が敵状を正確に把握していたのと同様に、家康方の井伊直政も、同時期に敵の動向を正確に把握していた。８月22日付で、井伊直政は本多正信・西尾吉次・村越直吉に対して、垂井には島津義弘と立花宗茂が在陣している、と記している[118]。上述のように、８月17日に島津義弘が垂井に着陣したので、この点は正確に直近の敵状を把握していたことがわかる。また、立花宗茂については、上述のように８月20日に垂井へ着陣予定であったことから（実際には来なかったが）、この点も直近の敵状を正確に把握していたことがわかる。

なお、８月中旬になっても家康が西上しなかった点については、石田三成方において訝しく思われていたようであり、８月19日付で、明石守重は戸川達安に対して、内々に思っていたこととして、ただ今まで家康の西上がないことを（むしろ）不審に思っていた、と報じている[119]。

５．岐阜城攻城戦（１）

上述のように、８月中旬～下旬に清須城及びその周辺に兵力を集結させた家康方の軍勢が攻撃目標にしたのが、石田三成方の織田秀信が城主である岐阜城であった。当時の岐阜城については、城主の織田秀信は「無人」（＝人数が少ないこと）であるので、日数は50日も抱える（＝守備する）ことはできないだろうという風聞があり[120]、そうした守備兵力数の少ない点が攻撃を受けた理由であったのかもしれない。

岐阜城攻撃については、すでに８月19日の時点で立案されていた。８月19日付で、黒田長政・徳永寿昌・奥平貞治は、井伊直政・本多忠勝に対して、①「此表」（＝尾張清須方面）のことは「跡々人数」が揃ったので、（まだ敵方として籠城している）犬山城方面へは「押之城」（＝押さえの城）をつくり、おのおの（の諸将が家康の）「御出次第」に川（＝木曽川）を越えて出陣することを決めた、②しかし、村越直吉が（家康からの）使いとして（こちらに）来て急に相談して（その決定が）変わり、どんなにしても家康の出馬がすぐにできず、はかどらないので、何事も必要なく、一刻も急いで川（＝木曽川）を越えて、どのようになっても果てるべき旨を「誰々なく」申し出て、おのおの（の諸将が）そのように同意した、③よって、「天下之勝負」は（この木曽）川越えに極まるので、御両所（＝井伊直政・本多忠勝）が急いで（こちらに）来て、とりあえず相談すべきであり、（井伊直政・本多忠勝の）御人数は置いておき、御自身のみで片時も早く（こちらに）出てくるのが肝要であると思う、と報じた[121]。

この書状の内容からは、当初、清須城及びその周辺での兵力集結により、石田三成方の軍勢に対して攻撃準備が整ったので、家康の出馬を待って（岐阜城攻撃のために）木曽川越えをすることを諸将が協議して決定したが、家康の西上の見込みが立たないため、家康の出馬を待たずに決死の覚悟で木曽川を越えて「天下之勝負」に決着をつけることになったことがわかる。この文面からは、黒田長政などが、家康の出馬が遅れていることに対して苛立っている様子を窺うことができる。井伊直政・本多忠勝（上述のように、この時点で井伊直政・本多忠勝は犬山城の近くに在陣していたと考えられる）を早急に清須城へ来るように呼び付けた目的は、木曽川渡河作戦の決行にあたり、軍監としての役目を井伊直政・本多忠勝に果たさせることにあったと思われるが、黒田長政などが井伊直政・本多忠勝を呼び付けたということは、黒田長政などの方が井伊直政・本多忠勝よりも立場的に上であったことを示している。

その点では、福島正則や黒田長政などによるこの軍勢は、井伊直政・本多忠勝の指揮統制下におかれたような本来の意味での家康の軍勢ではなく、家康不在でも軍事作戦を決行できる軍勢であった、ということは注目される。つまり、家康から遣わされた井伊直政・本多忠勝は、この軍勢を指揮統制する役割ではなく、家康不在の状況下で軍事作戦を決行するこの軍勢の軍事行動に対する単なる見届け役という軽い立場でしかなかったということになる。

清須城及びその周辺に兵力を展開していた家康方の軍勢が、北上して岐阜城を攻撃する

時に木曽川を渡河する必要があった。木曽川を渡河するため、河田の渡し（現岐阜県各務原市）を越えて進撃する池田輝政の組の諸将と、萩原の渡し・尾越（＝起）の渡し（現愛知県一宮市）を越えて進撃する福島正則の組の諸将と二手に分けて出陣した[122]。

８月22日付で、井伊直政は当日（８月22日）の戦況について、本多正信・西尾吉次・村越直吉に対して、①（池田輝政の組の戦いでは）敵（＝織田秀信方の軍勢）は2000人ばかりにて川端へ出陣してきたので、川（＝木曽川）を越えて合戦に及んだ、②そして、池田輝政の手元へ（敵の）首500程を討ち取ったという飛脚が来た、③（織田秀信方の）百々（どど）綱家と犬間勘平は討死した、③織田秀信はかろうじて山（＝岐阜城がある金華山）へ逃げ上がった、④（池田輝政の組の）一柳直盛は「案内之事」であったため、その家中では随分の者が討死をした（引用者注：百々綱家が討死したというのは誤報である）、⑤（すぐに）岐阜城を攻撃すべきところであったが、川越え（＝木曽川越え）で各自（の諸将）がくたびれていたので、今夜（８月22日の夜）は北方に陣取り、明日（８月23日）岐阜城を攻撃することになった、⑥大方、岐阜城の落居はまもなくであろうといずれも（の諸将）が言った、⑦この地の福島正則の組の衆は、明日（８月23日）、まず岐阜城へ押し詰めて、池田輝政の組の衆は惣構を破ったならば、岐阜城の上の「かち渡り」を越えて、佐和山へ出陣することが、今夜（８月22日の夜）の協議で決まった、⑧池田輝政の組は、浅野幸長・山内一豊・松下重綱・池田長吉・有馬豊氏・堀尾忠氏であり、一柳直盛は、この度の道筋について案内をした、⑨福島正則と（共に）この筋へ来た衆は、加藤嘉明・細川忠興・黒田長政・藤堂高虎・田中吉政・本多俊政・生駒一正・京極高知・筒井定次・松倉重政・秋山左近（ママ）（右近大夫光匡ヵ）・神保相茂である、⑩昨日（８月21日）は（本多忠勝と井伊直政は）無理に福島正則に続いて軍勢を進めたが、本多忠勝と井伊直政が川（＝木曽川）を越えたところへ、今夜（８月22日の夜）、いずれもの（諸将の）ことわりにて、（本多忠勝と井伊直政は）すべての（軍勢の）あとに軍勢を進めるべき、とのことであった、⑪両人（＝本多忠勝・井伊直政）のことは、家康からの御使いであるので（軍勢の）近くに立って（家康の）御意を得るためなので、是非とも福島正則の人数のあとに（本多忠勝と井伊直政の）軍勢を進めたいと述べたが、強く言われたのでしかたなく（あきらめた）、⑫よって、このようなので、何事かあって（本多忠勝と井伊直政から家康に）注進しても、（福島正則の軍勢から）３里、４里あとなので遅々（することに）なるだろう、⑬「當地」（＝岐阜城下から近距離の場所か？）から岐阜城へは３里あり、北方からは２里なので、明日（８月23日）も（岐阜城下の）町を破ることは池田輝政の組の衆であろう、⑭石田三成は、この時は岐阜へ切々（＝節々）見回りをして、そのうえ、河手（＝現岐阜市）というところに陣取りをしていたが、（こちらの軍勢が）川越え（＝木曽川越え）をしてからは（石田三成は）大垣城へひきこもって、物見を一人もこの筋へ出すこともない（状況である）、⑮今日（８月22日）、赤坂（現岐阜県大垣市）辺りまでも（こちらの）軍勢を進めれば（石田三成は）大方、（居城である）佐和山城へ逃げていくだろう、と（言ってこちらの軍勢では）いずれ（の諸将）も笑っている、⑯垂井（現岐阜県不破郡垂井町）には島津義弘と立花宗茂がいる、と報じた[123]。

この８月22日付の井伊直政書状は、江戸にいる家康の側近に対して出されたものであり、８月22日の家康方軍勢の木曽川渡河作戦とその後の戦闘状況などについて非常に詳しく述べられている。井伊直政は家康から軍監として遣わされていたので、こうした戦況を詳細に報告する必要があったのであろう。

この書状内容について大別すると、(A) ８月22日、池田輝政の組の諸将は木曽川を渡河して、岐阜城主の織田秀信方（織田秀信は石田三成方）の軍勢と戦い勝利した結果、織田秀信は山上の岐阜城へ逃げ込み、岐阜城攻撃は翌日の８月23日におこなうことになった（上記①～⑥)、(B) 翌日の８月23日の攻撃予定は、福島正則の組の諸将が岐阜城を攻撃し、池田輝政の組の諸将が岐阜城の惣構を攻撃して撃破した場合は、佐和山城（石田三成の居城）の攻撃に向かうことが８月22日夜の諸将の軍議で決まった（上記⑦)、(C) 池田輝政の組、福島正則の組に属するそれぞれの諸将の名前が具体的に記されている（上記⑧～⑨)、(D) ８月22日夜の軍議において、井伊直政と本多忠勝が軍勢を福島正則の軍勢のあとに進めることを希望したが否決され、すべての軍勢のあとにまわることになったため、家康への注進が遅れることになった（上記⑩～⑫)、(E) 翌日の８月23日は、池田輝政の組の諸将が岐阜城下の町を攻撃する予定である（上記⑬)、(F) 家康方の軍勢が木曽川越えをしてからは、石田三成は大垣城に退却した(上記⑭)、というように多岐にわたっていることがわかる。

この中で注目される点は、井伊直政と本多忠勝は福島正則の軍勢のあとにつくことを許されなかったことである。この結果、井伊直政と本多忠勝の軍勢は全軍の一番最後につくことになったが、こうした経緯は、この時点での家康サイドの立場が弱かったことを象徴している。その理由は、家康の出馬が遅れてしまったために、家康不在で木曽川渡河作戦を決行せざるを得なかった状況下における家康サイドへのペナルティーからくるものかもしれない。こうした状況を考慮すると、福島正則など諸将の方が、家康から遣わされた井伊直政・本多忠勝よりも上の立場にあり、家康への戦況報告もあとまわしにされたことから、福島正則など諸将の軍勢は家康方の軍勢であっても、本来の意味での家康の軍勢ではなかったことはあきらかである。

６．岐阜城攻城戦（２）

８月22日の木曽川渡河作戦と同月23日の岐阜城攻城戦で中心的役割を果たした福島正則は、同月24日付で結城秀康と浅野長政に対してそれぞれ戦況を具体的に報じた。

同月24日付で、福島正則は結城秀康に対して、①一昨日（８月）22日に萩原・尾越（の渡し)を舟にて福島正則が先手として越し、加賀野井城・竹鼻城近辺を放火して、翌日(８月23日）未明に岐阜へ押し掛け（＝攻撃して)、即時に町を打ち破った、②瑞龍寺（の砦）には丸が３つあったが、(そのうちの）２つと、そのほかに（岐阜城の）二・三の丸をすべて乗り崩し、本丸も「天主」まで攻め詰めたところ、木造長政・百々綱家以下が出て来て、織田秀信の御身命について異儀のないようにと（述べて）降参した、③よって、井伊

直政・本多忠勝と相談して支障がない旨を述べられたので、まず尾州まで（織田秀信は）退いた、④（岐阜）城中の者を多く討ち捕えたが、そのことは、井伊直政・本多忠勝がよく知っているので、きっと（あとで井伊直政・本多忠勝から）申し上げるであろう、⑤次に、（岐阜）城攻めをした時に後詰として、石田三成の者が合渡川の向いまで出陣してきたが、黒田長政・藤堂高虎らが川を越して一戦に及び追い崩して多くを討ち捕えた、⑥きっと、この状況はすぐに（井伊直政・本多忠勝から）申し上げるであろう、⑦今日（８月24日）それぞれ（諸将が）相談して、明日（８月25日）佐和山表へ出陣する（予定）なので、重ねて良いたより（＝戦勝報告という意味）を申し上げるつもりである、と報じた[124]。

このことからは、８月22日、福島正則が先手として出陣し、翌日の８月23日に岐阜城を攻撃して本丸の天守まで攻め上（のぼ）った結果、城主である織田秀信が降参したので、井伊直政・本多忠勝の了解を得て織田秀信の身柄を尾張国内（＝清須城か？）へ送ったことがわかる。その他の場所での戦闘として、岐阜城攻めの時に後詰として出てきた石田三成の軍勢と、黒田長政・藤堂高虎などの軍勢との間で戦いがあり、石田三成の軍勢が敗北したことがわかる。そして、８月24日に諸将が協議して、翌日の８月25日に、石田三成の居城である佐和山城を攻撃することになった、としている。今後の佐和山城への攻撃予定については、上述の８月22日付井伊直政書状にも記されているが、実際には即時に佐和山城攻撃が実施されたわけではなかった。その理由としては、後述のように、８月27日付家康書状[125]により、家康と秀忠の到着までは軍事行動を控えるように指示されたので、そのため佐和山城攻撃予定が中止になった可能性も考えられる。

なお、岐阜城主織田秀信の降伏の受諾について、福島正則が井伊直政・本多忠勝と協議している点は注目される。このことは、福島正則の一存では織田秀信の降伏を受諾することができず、家康から遣わされた井伊直政・本多忠勝が軍監として一定の役割を果たしたことを示している。上述のように、岐阜城攻城戦では、井伊直政・本多忠勝の軍監としての役割は諸将からかなり低い扱いをされたのであるが、降伏の受諾という戦局の基本線に関する問題には家康から遣わされた軍監として井伊直政と本多忠勝が関与した、と見なすことができる。

８月24日付で、福島正則は浅野長政に対して、①「爰元」の様子は池田輝政・浅野幸長と相談している、②よって、一昨日（８月）22日に池田輝政・浅野幸長・遠州衆が川越え（＝木曽川越え）をしたところ、岐阜衆が少々出て来て、一戦に及び追い崩したのは手柄であった、③次に、昨日（８月23日）、細川忠興・加藤嘉明・福島正則が稲葉山へ取り詰め（＝厳しく攻めて）、早速、落去した、④（岐阜城主の）織田秀信はいろいろと降参したので、小姓共２、３人にて尾州へ送った、⑤「爰元」のことは、いよいよはかどるように池田輝政・浅野幸長と相談して、「秀頼様御為」に良いようにするつもりである、と報じた[126]。

このことからは、８月22日の木曽川渡河後の織田秀信方の軍勢との戦いでは池田輝政の組の諸将が活躍し、翌日（８月23日）の岐阜城への攻撃では福島正則の組の諸将が活躍し

て岐阜城を落城させたことがわかる。福島正則が池田輝政・浅野幸長と協議して「秀頼様御為」に良いようにするつもりである、と記している点は注目される。このことは、この戦いの本質として、福島正則の意識の根底には、家康のために戦っているのではなく、秀吉の後継者である秀頼のために戦っていることを示している。つまり、あくまで家康に与同して戦うのは秀頼のためであって、この時点で家康の天下支配を福島正則は想定していなかった、ということになる。

岐阜城攻城戦における家康方の軍勢の編成についてまとめると表７のようになる。表７を見るとわかるように、岐阜城攻城戦をおこなった家康方の軍勢は、池田輝政の組の諸将と福島正則の組の諸将に大きく分けられ、池田輝政の組の諸将は上述した東海道外様グループを中心としているのに対して、福島正則の組の諸将は上述した遠国外様グループを中心としていることがわかる。上述した徳川グループでは軍監の井伊直政・本多忠勝以外は、この戦いに参加していない。つまり、軍監の井伊直政・本多忠勝の２人を除くと、岐阜城攻城戦の家康方の軍勢は、家康に自主的に与同した外様の諸将だけで編成されていたことになる。このように、外様の諸将だけで編成されていたことの意味については後述したい。

この時点（８月22日・23日）では、松平忠吉、石川康通、松平家清はすでに清須に着陣しており[127]、奥平貞治も清須城にすでに在城していたと考えられるが[128]、この戦いには参加していないので清須城の守備にあたっていた可能性が高い。東海道外様グループの中村一栄は、本来であれば、池田輝政の組に入るはずであるが、入っていないのでこの戦いには参加していないことがわかる。この時の中村一栄の軍事的動向については後述する。

なお、石川康通については、岐阜城攻城戦に関する８月22日付の注進状を家康が披見した旨の８月25日付家康書状の宛所として井伊直政・本多忠勝・石川康通というように３名宛になっているので[129]、軍監として井伊直政・本多忠勝とともに前戦に出ていた可能性も考えられる。

岐阜城攻城戦における家康方の軍勢の人数については、福島正則の手組１万、黒田長政・加藤嘉明の手組１万5000という人数[130]がわかるが、それ以外の具体的人数は一次史料では確認できない。

家康は８月25日付で岐阜城攻城戦に参加した諸将に対して、井伊直政と本多忠勝から報告を受けた旨の書状を一斉に発給した[131]。この内容は、８月22日に家康方の軍勢が萩原の渡し・尾越（＝起）の渡しを越えたことと、翌日（８月23日）は岐阜城に攻撃をかける予定であることの報告を井伊直政と本多忠勝から受けた旨を記している。

８月25日付で家康が井伊直政・本多忠勝・石川康通に対して出した書状では、８月22日の注進状を同月25日に披見したと記されているので[132]、８月22日に岐阜から出した注進状が同月25日には江戸の家康のところへ届いたことになり、あしかけ４日で着いたことがわかる。

８月22日にはそれ以外にも注進状が家康に対して出されており、家康は８月26日付で岐阜城攻城戦に参加した諸将に対して、８月22日の注進状が今日（同月26日）午刻（昼の12

時頃）に着いた旨の書状を一斉に出している。その宛所を見ると、福島正則宛、池田輝政宛、堀尾忠氏など池田輝政の組の諸将７名宛、井伊直政・本多忠勝宛としてそれぞれ一通ずつ出されているので[133]、史料としては伝存しないものの、福島正則の組の諸将12名宛の８月26日付家康書状も出された可能性が高い。

この８月26日付家康書状では、川表の戦いで敵数千人を討ち取ったことと、岐阜城へ追い付いた（＝岐阜城に迫った、という意味か？）という報告を受けたことが記されているので、おなじ８月22日付の注進状であっても、上記の注進状よりあとに出されたものであることがわかる。

その後、岐阜城を攻撃して落城させた旨の注進状も出されたようであり、家康は８月27日付で岐阜城攻城戦に参加した諸将に対して、岐阜城を落城させたことを御手柄として褒賞した書状を一斉に出している。その宛所を見ると、福島正則宛、池田輝政宛、藤堂高虎など福島正則の組の諸将９名宛、池田長吉宛としてそれぞれ一通ずつ出されているので[134]、史料としては伝存しないものの、池田長吉を除く池田輝政の組の諸将６名宛の８月27日付家康書状も出された可能性が高い。

上述のように、８月23日に岐阜城攻城戦を開始し、同日に岐阜城を落城させたことにより、家康方の軍勢は岐阜城及び岐阜城下を制圧した。このことを受けて、８月23日から一斉に禁制を発給した（表６参照）。８月23日、同月24日、同月26日の禁制の発給者については、福島正則が単独で発給したケースが４例、池田輝政と福島正則が連署して発給したケースが２例、井伊直政と本多忠勝が連署して発給したケースが３例というように分かれる（表６参照）。家康方の軍勢の諸将の中で禁制を発給したのは、軍監の井伊直政と本多忠勝を除くと、福島正則と池田輝政だけであり、福島正則と池田輝政が最前線の現地における最高指揮官であったことがわかる。

７．犬山城籠城と明け渡し

犬山城には石田三成方として、城主の石川貞清のほか、加勢として加藤貞泰（美濃黒野城主）・竹中重門（美濃岩手城主）・関一政（美濃多良城主）・稲葉貞通（美濃郡上八幡城主）など美濃国内の諸将が籠城していた。

７月下旬の犬山城に関する状況から見ていくと、７月26日付で三奉行（前田玄以・増田長盛・長束正家）は、中川秀成に対して、濃州のことは、織田秀信（岐阜城主）・稲葉貞通（美濃郡上八幡城主）と大垣城・犬山城（引用者注：犬山城は尾張国内に位置する）はすべて秀頼様に忠節をすることに決まり、人質を進上した、と報じた[135]。このことから、７月26日の時点で、犬山城主（石川貞清）は石田・毛利方であったことがわかる。

しかし、７月26日直後の時点では、まだ犬山城への籠城はされなかったようであり、８月３日付加藤貞泰宛家康書状[136]や８月８日付石川貞清宛家康書状[137]には、犬山城への籠城に関する記載はない。

家康書状における、犬山城への籠城に関する記載の初見は、８月12日付井伊直政・本多

忠勝宛家康書状である[138]。この書状では、加藤貞泰は犬山城に籠城しているので、「其地」（＝犬山城の近辺か？）において福島正則と相談して、しかるべき次第に才覚をするように家康が指示している。

この家康書状は、井伊直政・本多忠勝からの注進状を受けて出されたと考えられ、井伊直政・本多忠勝が犬山城の近辺に在陣していたとすると、注進状が家康のいる江戸まで、あしかけ４日～５日かかったと仮定した場合[139]、８月８日或いは同月９日に注進状が出されたことになる。とすると、８月８日～同月９日頃に犬山城籠城があきらかになったことになるが、石田三成は８月８日に尾・濃境目の仕置のために尾州表に出陣しているので[140]、この軍事的動きに合わせて、石田三成の指示により、８月８日～同月９日頃に犬山城籠城が開始された可能性が高い。

８月19日付で、黒田長政・徳永寿昌・奥平貞治は井伊直政・本多忠勝に対して、犬山表に「押之城」をつくり、木曽川を渡河して出陣する予定を報じているので[141]、８月19日の時点でも犬山城籠城は継続しており、犬山城籠城に対峙するため、家康方軍勢から一定の兵力をまわす必要があったことがわかる。

８月22日付で、佐々正孝は秋田実季に対して、犬山城は城主の石川貞清のほか、加勢として加藤貞泰・竹中重門が籠城していることを報じているので[142]、８月22日の時点でも犬山城籠城が継続していたことがわかる。

８月24日付で、井伊直政は、犬山城に籠城している竹中重門・加藤貞泰・関一政に対して、①内々に申しているように、昨日（８月23日）岐阜城を乗り落としたところ、後巻（＝後詰）として、石田三成の先手の者共が合渡川端まで出てきたので、一戦に及び追い崩し、すべて討ち果たした、②（よって）早々に内々に「其筋目」を引き退くべきであり、その通り駿河衆へも申し遣わしたので了承するように、と報じた[143]。

この内容は、８月24日、前日に岐阜城を落城させたことと、岐阜城救援に後詰として出陣してきた石田三成の軍勢が敗北したことを報じることにより、こうした石田三成方軍勢の不利な状況を認識させて、加勢として犬山城に籠城している竹中重門・加藤貞泰・関一政に対して、早々に犬山城から撤退するように圧力を掛けたものであることがわかる。この場合の駿河衆とは、中村一栄の軍勢を指すものと思われ、上述のように、中村一栄の軍勢は岐阜城攻城戦に参加していないことを考慮すると、犬山城籠城の軍勢に対峙するため犬山城の至近距離に布陣していたと考えられる。よって、加勢として犬山城に籠城している竹中重門・加藤貞泰・関一政が犬山城から撤退する可能性があることを、井伊直政が中村一栄に伝えた、という意味であろう。つまり、加勢として犬山城に籠城している竹中重門・加藤貞泰・関一政に撤退を勧告して、城主の石川貞清と離間させることが井伊直政の狙いであった、と考えられる。このように、岐阜落城の翌日に井伊直政が、加勢している３名に対して犬山城からの撤退を勧告した、という点が注目される。

８月25日付で、加藤光政は山内一豊に対して、加藤貞泰が犬山城に籠城していることについて何とも当惑しており、石川貞清もやがて（犬山城から）出るだろうと思っている、と報じている[144]。このことからは、８月25日の時点で、犬山城主の石川貞清についても、

やがて犬山城を明け渡すことが予想されていたことがわかる。

８月28日付で、井伊直政は加藤貞泰・関一政・竹中重門に対して、①質物（＝人質）のことは、福島正則から「其許」（＝犬山城）へ遣わした衆へ念を入れて渡されたので、間違いなく当陣へ（人質が）来るであろう、②次に、（そちらから）申し越した紙面の通りに、家康へ申し遣わした、③最前より（そちらから）関東まで申し通していることは、この時なので、いよいよ（家康への）忠節を思うように、④御用のことがあれば、拙者（＝井伊直政）が馳走をするつもりなので、安心するように、⑤いずれもお目にかかって申し達するつもりである、⑥なお、夜を日に次いで、「當地」まで御参陣するように、⑦（参陣に）遅れては、最前の首尾と違うことになる、⑧「當地」に着いたならば、（そのことを）家康へ申し遣わすつもりである、と報じた(145)。

この内容からは、犬山城に籠城している加藤貞泰・関一政・竹中重門から人質を取り、家康への忠節を誓わせるなど、８月28日の時点で犬山城明け渡しが近付いていたことがわかる。そして、家康への取り次ぎは井伊直政がおこなうということで安心させて、早々に井伊直政が在陣している場所へ来て家康方の軍勢に加わるように伝えていることがわかる。井伊直政が在陣している具体的場所は不明であるが、８月28日の時点では岐阜城攻城戦が終了して、家康方の軍勢は岐阜より西進しているので、赤坂（現岐阜県大垣市）あたりに在陣していたのかも知れない。

８月28日付で本多忠勝は加藤貞泰に対して、①「其城」（＝犬山城）は、早くも（家康方へ）渡すとのことなので、「貴所」（＝加藤貞泰）の「御作（ママ）（身ヵ）上之儀」は精一杯肝煎をするつもりである、②（そして）早々に「我々」（＝本多忠勝）の陣所まで出て来るように、③最前、「此表」へ陣寄せをした時も「貴所」（＝加藤貞泰）の老母のことも異儀のないように、と「我々」（＝本多忠勝）が折紙を遣わした、④（よって）どのようなことも手抜かりがあってはいけない、⑤早速（本多忠勝の陣所まで）出てくるように、⑥なお、「其城」（＝犬山城）について才覚をして、早々に（家康方へ）渡すようにすべきである、と報じた(146)。

この内容からは、犬山城の明け渡しについて、加藤貞泰が才覚をするように本多忠勝から要請し、その後は早々に本多忠勝の陣所まで出てくるように伝えたことがわかる。上記の同日付の井伊直政書状の宛所が３人であるのに対して、この本多忠勝書状の宛所は加藤貞泰だけであり、上記の同日付の井伊直政書状には「才覚」という文言がない点を考慮すると、犬山城明け渡しの中心的役割を果たしたのが加藤貞泰であったことがわかる。そして、上記の同日付の井伊直政書状とこの本多忠勝書状の内容を勘案すると、井伊直政と本多忠勝の在陣しているところは同じ場所であった、と考えられる。

９月３日付で、家康は加藤貞泰・竹中重門に対して、両通の書状を披見し（家康への）忠節について感悦の至り、と伝えている(147)。また、９月４日付で家康は石川貞清（犬山城主）に対して、両人（＝井伊直政・本多忠勝か？）方への書状を披見し、この度の「不慮之儀」は、やむを得ないなりゆきであったが、日頃のよしみを思って（家康へ）忠節をおこなったことに満足している、と伝えている(148)。

この９月３日付及び９月４日付の家康書状における「忠節」という文言が、犬山城明け渡しを指しているとすれば、９月３日～同月４日の時点では、犬山城の明け渡しは完了していたことになる。

上述のように、８月８日～同月９日頃に犬山城籠城が開始されたと考えられるので、９月３日～同月４日の時点で、犬山城の明け渡しが完了していたとすると、犬山城への籠城の期間は、約１ケ月弱であったことになる。

９月３日付で、福島正則・池田輝政・本多忠勝・井伊直政は連署して、加藤貞泰・稲葉通重に対して、「うしき村・ほんてん村両所」（現岐阜県瑞穂市牛牧・本田）に在陣するように指示した[149]。加藤貞泰はそれまで犬山城に籠城していたので、こうした指示を受けたということは、９月３日の時点では、犬山城の明け渡しが完了して、福島正則・池田輝政・本多忠勝・井伊直政の陣所の近くに加藤貞泰と稲葉通重が在陣していたということになる。

９月５日付で、家康は加藤貞泰に対して、犬山城のことは「其方」（＝加藤貞泰）の才覚により早々に済んだことに満足していると述べ、先手へ参陣したことを了承している[150]。このことから、犬山城明け渡しについて、加藤貞泰が中心的役割を果たしたことがわかるとともに、９月５日の時点では、犬山城の明け渡しがすでに完了して、加藤貞泰は犬山城から撤退して家康方の軍勢の先手へ参陣していたことがわかる。

９月７日付で、家康は稲葉貞通に対して、（稲葉貞通はそれまで）犬山城に籠城していたが、井伊直政が（犬山城を明け渡すように）述べたため、犬山城を明け渡して、長島城（城主は福島高晴）への加勢のために（長島城へ）移ったことを了承した、と報じた[151]。このことから、犬山城明け渡し後、稲葉貞通は、９月７日の時点で、家康方軍勢への加勢のため長島城に移っていたことがわかる。

８．家康の出馬と関ヶ原の決戦

家康はもともと７月下旬に西上する諸将とともに即時に上洛する意志を表明していたが[152]、実際には上洛せず、８月５日に小山から江戸城に帰城してからは、８月一杯は家康自身は軍事行動を完全に停止して江戸城に引きこもったままであった。このように、大規模な戦争の最中に、家康が約１ケ月間軍事行動を停止したことは異常な事態であったが、その背景や理由については後述する。

上述のように、福島正則と池田輝政を中心とした家康方の軍勢の攻撃により、８月23日に岐阜城が落城したが、この落城の知らせを受けて、９月１日に家康は江戸城を出馬して西上の途についた。

８月28日付で、家康は浅野長政に対して、①８月23日に岐阜城を乗っ取り、一人も洩らさず皆討ち捕らえたという注進があったので、来る（９月）３日に家康が出馬することになった、②秀忠は、中山道へ軍勢を進めるので、浅野長政が同道して御異見をするように頼み入る、と報じた[153]。

このように、岐阜城を攻略したと注進があったので、家康が江戸から出馬することになった、と明確に記している点は注目される。このことは、これまで尾張国内に在陣した家康方軍勢の決定的勝利がなかったために家康がこれまでは江戸から出馬しなかった、という意味にとることもできる。なお、この家康書状では、江戸出馬を９月３日予定と報じているが、実際には家康は９月１日に江戸を出馬した(154)。

秀忠の中山道への出陣については、８月28日付で、秀忠が黒田長政に対して、①これまで宇都宮にいて境目を丈夫に申し付けたので、信州真田表で仕置を申し付けるため、去る（８月）24日に宇都宮を立って、今日（８月）28日に上州の松井田に至り着陣した、②近日、真田表へ軍勢を進めて手置等を申し付け、隙明け次第に上洛を遂げる覚悟である、と報じた(155)。

このように、秀忠は８月28日にそれまで在陣していた宇都宮を立って、信州の上田城（城主は真田昌幸）を攻略したあと上洛予定であったことがわかる。

こうした家康と秀忠の西上と、岐阜城攻略後の福島正則・池田輝政の軍事行動との関係について、家康は次のように指示している。８月27日付で家康は、福島正則・池田輝政それぞれに対して、①岐阜城のことは、早々に申し付けたところ、御手柄は書中に申し尽くし難い、②秀忠は、まず中山道を出陣して上（のぼ）るように家康が申し付けた、③家康は「此口」（＝江戸）から出陣する予定である、④軽率なことのないように「御働」（＝軍事行動）をすることが専一であり、（次の軍事行動までは）我等父子（＝家康と秀忠）を待つように、と報じた(156)。

この内容によれば、秀忠の中山道への出陣と西上は家康が命じたものであり、家康の西上と連動していたことがわかる。そして、福島正則・池田輝政の次の軍事行動については、家康だけでなく秀忠の到着も待つように指示しているので、家康の当初の計画では、家康が率いる軍勢と秀忠が率いる軍勢を合わせて、石田・毛利方の軍勢と決戦をする予定であったことがわかる。この点については、周知のように秀忠の軍勢が当初の予定よりも延着したために関ヶ原の戦いに間に合わず、実現することはなかった。

上述の福島正則・池田輝政それぞれに宛てた８月27日付家康書状と同内容の家康書状が、藤堂高虎・黒田長政など福島正則の組の諸将９名にまとめて宛てて出されているので(157)、同日付同内容の家康書状が池田輝政の組の諸将にもまとめて宛てて出されていた可能性が高い。

なお、家康方の諸将の中で、福島正則と池田輝政に対してはそれぞれ個別に８月27日付家康書状が出されたことは、福島正則と池田輝政への家康の扱いが他の諸将とは別格になっていたことを示しており、岐阜城攻城戦で福島正則と池田輝政がそれぞれの組を編成したことからもわかるように、現地における最高指揮官としての扱いであったことがわかる。

上述のように、当初は岐阜城攻略後は佐和山城攻撃が予定されていたが、家康が到着するまで軍事行動を控えるように指示されたため、早期の佐和山城攻撃は延期されたと考えられ、石田三成・小西行長・島津義弘・宇喜多秀家などの諸将が籠城している大垣城を包

囲する作戦に切り換えられたようである。木曽川渡河作戦（８月22日）と岐阜城攻城戦（８月23日）後における諸将の在陣場所については、以下のようになる。

①８月26日…美濃表において、敵（＝家康方の軍勢）は大川（＝木曽川）を越え、赤坂まで放火して、退くことができず在（陣）している[158]。

②８月27日…岐阜落城後、山内一豊は、垂井・関ヶ原まで焼き払い、赤坂・青野原に陣取った。大垣城に宇喜多秀家・小西行長・石田三成が立て籠もっているので、付城を拵えて（大垣城を）包囲している[159]。

③９月１日…福島正則・池田輝政・藤堂高虎・黒田長政・田中吉政・一柳直盛は垂井に陣取りしている[160]。

④９月３日…福島正則・池田輝政・本多忠勝・井伊直政は連署して、加藤貞泰・稲葉通重に対して、大垣城中より刈田に出てくるので、加藤貞泰と稲葉通重は押えとして「うしき村・ほんてん村両所」（現岐阜県瑞穂市牛牧・本田）に在陣し、「夜待」（＝夜、敵を待ち伏せること）を申し付けるように、と指示した[161]。このことから、加藤貞泰と稲葉通重の在陣場所が「うしき村・ほんてん村両所」であることと、９月３日の時点で、福島正則・池田輝政・本多忠勝・井伊直政は大垣城の動向が監視できる場所に在陣していたことがわかる。

⑤９月７日…９月７日の時点で、京極高知（信濃飯田城主）は赤坂に着陣していた[162]。

このように、８月末～９月初旬には、家康方の主力諸将は、赤坂（現岐阜県大垣市赤坂町）から垂井（現岐阜県不破郡垂井町）にかけて在陣していたことがわかる。こうした動きは、石田三成も的確に把握しており、敵（＝家康方の軍勢）は９月12日の時点でもまだ赤坂に在陣している、と報じた[163]ほか、９月７日に南宮山に陣取りをした吉川広家は、敵（＝家康方の軍勢）は垂井・赤坂にいて（敵・味方は）双方中間は一里（＝約3.93km）である、と報じた[164]。大垣城と赤坂の間は直線距離にして約3.6kmであるので約一里弱であり、吉川広家書状における表記は正しいことがわかる。大垣城と垂井の間は直線距離にして約8.4kmであるので約二里ということになる。

家康方の主力諸将が、赤坂～垂井にかけて在陣した狙いは、赤坂～垂井は大垣城から見て北西に位置しているので、大垣城から近江に通じるルートを遮断する目的があったと思われる。また、大垣城から近距離に位置していることから、付城をつくって大垣城を包囲する目的もあったと思われる。

９月朔日付で、家康は福島正則・池田輝政に対して、陣城を堅く成して（＝守って、という意味か？或いは、つくって、という意味か？）家康（の到着を）待つように指示した[165]。家康は、出陣の目的について、９月朔日付で、堀直寄に対して、大垣城に石田三成・島津義弘・宇喜多秀家・小西行長が籠城しているので、それを包囲して水攻めをすべく出馬することになった、と報じている[166]。このように、家康の出陣目的は大垣城攻撃であると明記されている点は注目される。９月９日付で、家康は福島高晴（伊勢長島城主）に対して、「其許」においては、敵が程近いので、万事油断なく仕置等をするように指示するとともに、一両日中に大垣表へ出陣する予定である、と報じている[167]。

大垣城に関する状況について、９月７日付で、家康は最上義光に対して、宇喜多秀家・島津義弘・石田三成を大垣城へ追い込み、通路を切り陣取りをしている、と報じた[168]。この場合、通路を切り陣取りをしている、というのは上方へのルートを遮断して大垣城を包囲している、という意味であろう。

大垣城包囲戦については、８月29日付で保科正光が家臣の黒河内長三に対して出した書状の内容に詳しく記されている。保科正光はこの時、浜松城の在番であり（表３参照）、昨日（８月28日）、両三度（＝２、３回）先手より注進があった内容として、①大垣城に石田三成、宇喜多秀家、小早川秀秋、島津義弘、小西行長、そのほか、秀頼様の御馬廻衆の「随一之衆五三輩」が立て籠もっている、②「此方」の御人数（＝家康方の軍勢）が攻め寄せて、去る（８月）26日より付城をつくって厳しく攻めている、③（大垣城の）城中の衆より安芸の毛利方へ後詰をするように、という飛脚が来たところを虎口場にて生け捕り、すぐに（このことを）注進した、④「天下之落居」は、ただこの城（＝大垣城）一城に（かかっている）うえは、西国衆が後詰をするのであろうか、⑤御味方の人数の着到は７万の「積」（＝見積り）であるので、大方のことでは、後詰は叶い難いのではないかと思う、⑥しかし、御味方中の人数は勝ちに乗って、あまりに敵をみくびっているのでこのことはあぶないと思っている、⑦（敵が）後詰をするより前に、家康が着馬するのではないかと思う、⑧家康の馬さえ清須城へ着けば、（敵は）後詰のことも考えないであろう、⑨そのうえ、大垣城に籠っている人数が２万余いる、とのことなので、（大垣城のような）小城にて、そのような人数が立て籠もっていては、すぐに詰まる（＝いっぱいになる）だろうと思う、⑩そのようであれば（家康による）「天下之御本意」は程なくであろう、⑪もし万々一、美濃口に向い（敵が）後詰をしたならば、大垣城が落城するまでは、対陣（＝敵と向かい合って陣取ること）になるのではないかと考えるので、「天下之弓箭」はこの時に極まる、⑫とにかく、「天下之勝負」は大垣一城に極まるので、（勝敗の決着がつくのは）30日の間であろう、と報じた[169]。

上記①では、大垣城に籠城している石田三成方の諸将の具体名を列挙しているが、この中に小早川秀秋が含まれている点は事実誤認である。ただし、この時点で、徳川サイドの保科正光から見て小早川秀秋が敵対する部将として認識されていたことは注目される。「秀頼様の御馬廻衆の「随一之衆五三輩」」、というのは秀頼の馬廻衆の精鋭部隊という意味であろうか。大垣城に秀頼の馬廻衆も籠城しているというのが事実であれば、豊臣公儀の直属部隊が籠城しているということになり、大垣城に籠城している石田三成方の軍勢が豊臣公儀軍であることを明確に示すことになる。

上記②では、家康方の軍勢が大垣城を攻撃中であり、８月26日より付城を構築して大垣城を攻撃している、としている。付城がいくつ構築されたかは記されていないが、８月26日から大垣城に対する攻城戦が開始されたことがわかる。この点は、上述したように８月27日付で山内一豊が、付城をつくって大垣城を包囲している、と報じた[170]ことと日付的に符合する。石田三成方の諸将が籠城する大垣城を、家康方の軍勢が付城を構築して攻撃する、という構図は城攻めの定石（基本的セオリー）であろう。

上記③は、大垣城に籠城している諸将が毛利方に対して後詰をするように要請した、という記載である。この場合の毛利方とは、南宮山に布陣した毛利秀元を指すと考えるのが妥当であろう。この生け捕られた飛脚以外に後詰を要請する他の飛脚が毛利秀元のもとへ届いていたと仮定すると、毛利秀元が南宮山に布陣した目的は、家康方の軍勢に攻撃されている大垣城に籠城する諸将を、後詰として救援するためであった、ということになる。毛利秀元麾下の吉川広家が、伊勢の津城を攻撃して陥落させたあと美濃方面に出陣して、南宮山に陣取りをしたのが９月７日であるので(171)、この保科正光書状が出された８月29日の時点で、大垣城に籠城している諸将から毛利秀元に対して後詰の要請が出されていて、毛利秀元がその７日後に南宮山に布陣した、ということは時間の経過としては整合する。よって、後詰の要請により毛利秀元が南宮山に布陣した、という可能性は十分考えられる。こうした、いわゆる後詰決戦のシナリオも、攻城戦の基本的セオリーである。

この後詰を要請する飛脚を（家康方の軍勢が）生け捕ったことを注進した、としているが、この注進は、この時点で江戸にいる家康に対する注進と思われ、当時、浜松城に在番していたことから保科正光が知ることになったと考えられる。つまり、江戸にいる家康への注進は、東海道の諸城に在番していた徳川家家臣の間をリレー形式のように伝達したと推測され、こうした点にも、東海道の諸城に徳川家家臣が在番する意味があったのであろう。なお、飛脚を生け捕った場所を「虎口場」としているが、この場合の「虎口」とは「城の出入り口」の意味ではなく、「戦争の際の危険な戦闘、あるいは、衝突」(172)という意味であると考えられ、なんらかの戦闘状態の中で、後詰を要請する飛脚を生け捕ったということになる。

上記④で、「天下之落居」はこの大垣城一城にかかっている、としているのは、大垣城をめぐる後詰決戦が、天下の行方を左右する両陣営（家康方の軍勢と石田三成方の軍勢）の一大決戦になると保科正光が予想していることになり、西国衆が後詰をするかどうか重大な関心をもって注視していたことがわかる。

上記⑤、⑦、⑧は、後詰決戦の可能性について、兵力格差の点からその実現性に疑問を呈しているのであるが、この指摘からは、攻城側の兵力が後詰をする兵力よりも圧倒的に多い場合は、後詰決戦は実現しない、というセオリーがあったことを示唆している。この場合、攻城側（＝家康方の軍勢）の兵力数を７万人としているので、後詰としての毛利秀元の兵力数をそれよりもかなり少なく推定していたことになる。この書状が書かれた８月29日の時点では家康はいまだ江戸城にいたが、家康が出陣して今後清須城に到着すれば、後詰決戦の可能性はさらに低くなると想定している。その理由として推測できるのは、現時点でもかなりの兵力差があり、家康が着陣すれば、さらに兵力差が開いて後詰決戦の可能性が低くなる、という意味にとらえられる。

上記⑥にあるように、味方の軍勢（＝家康方の軍勢）が勝ちに乗じて、敵（＝石田三成方の軍勢）をかなりみくびっているが、そうした状況は逆に危ない、という指摘は、同月23日の岐阜城落城後の有利な戦況が持続するものではなく敵に逆転される可能性を含んでいる、という意味にとることができる。このように、家康サイドの保科正光が、この時点

での戦況を決して楽観視せず冷静に分析していた点は注目される。

上記⑨では、大垣城のことを「小城」と指摘している点が重要であり、当時の大垣城の城主伊藤盛正の石高が３万石であったことを考慮すると首肯できる指摘である。現在、関ヶ原の戦い関連の概説書では、大垣城の紹介をする場合、江戸時代の大垣城天守をモデルにした現在の復興天守の写真などを紹介して大垣城がいかにも広大な城であったかのようなイメージを植え付けているが、当時の大垣城が「小城」であったということを勘案すると、そうしたイメージが歴史認識として正しいものではないことがわかる。

そして、大垣城に籠城している人数が２万人余としている点も重要である。このことは、上述のように、大垣城を攻撃している家康方の軍勢が７万人であるから、攻城側７万人対籠城側２万人余という対比になることを示している。つまり、この時点で大垣城周辺に展開する両陣営の兵力数はかなりの兵力差があり、攻城側兵力数が籠城側兵力数の3.5倍であったことがわかる。

大垣城の規模と籠城兵力数の妥当性については、大垣城のような小城に２万人余が籠城するといっぱいになる、と指摘している。つまり、小城である大垣城に収容能力を越える人数（２万人余）が籠城しているため、籠城側にとってかえって不利になる、という見通しを述べたものであろう。結果的には、石田三成をはじめとした籠城側の諸将は大垣城から出て、関ヶ原で家康方の諸将に決戦を挑むことになるのであるが、籠城側の諸将が長期間の籠城戦をせず、なぜ大垣城から出て野戦で決着を付けようとしたのかを考えるうえで、保科正光による上記の指摘は重要なヒントになるであろう。

上記⑪では、万一、（可能性は低いが）毛利秀元が大垣城を救援するために出陣して、後詰決戦を挑んできた場合、家康方の軍勢は、大垣城を落城させるまで、向かい合って対陣することになる、としている。「天下之弓箭」がこの時に極まる、としているのは、後詰決戦がおこなわれた場合、大垣城をめぐる攻防戦が、その後の天下支配の行方をも左右するような両陣営の最終決戦になる、という意味であろう。

上記⑫は、大垣城の籠城戦をめぐる勝敗が30日間程度で決着する、という見通しを述べたものである。「天下之勝負」が大垣一城に極まる、という記載は、大垣城籠城戦の勝敗が、その後の天下の行方を決定付ける、という意味であり、戦局は重大な局面を向えるに至った、という認識を保科正光は持っていたと考えられる。

このように、保科正光は大垣城攻城戦が長期間の籠城戦になると予想していた。このことは上述したように家康が大垣城を水攻めにすると述べたり[173]、陣城をつくるように指示した[174]ことからもわかるように、家康も大垣城攻城戦が長期間の籠城戦になると予想していたことになり、野戦を全く想定していなかったという意味で注目される点である。

それでは、大垣城を包囲した家康方の軍勢はどこに付城をつくったのであろうか。上述のように、山内一豊は、８月27日の時点で赤坂・青野原に陣取り、付城をつくって大垣城を包囲している[175]。陣取った場所である赤坂（現岐阜県大垣市赤坂町）・青野原（現岐阜県大垣市青野町）に付城をつくったとすると、赤坂は大垣城から直線距離にして約3.6km（＝約一里）であり、青野原は大垣城から直線距離にして約6.4km（＝約一里半）である

ので、大垣城から一里～一里半程度のところに付城をつくったことになる。つまり、付城といっても大垣城の目の前のような至近距離につくったわけではなかったことがわかる。位置としては、赤坂・青野原は大垣城から西北に位置しているので、大垣城から上方へのルートを遮断する目的があったと考えられる。

大垣城籠城といっても、石田三成方の軍勢が何もせずに籠城していたわけではなく、上述のように、大垣城中より刈田に出てきた[176]ことがわかる。この刈田への押さえとして、加藤貞泰と稲葉通重は「うしき村・ほんてん村両所」（現岐阜県瑞穂市牛牧・本田）に在陣し、「夜待」（＝夜、敵を待ち伏せること）をするように福島正則などから指示されているので[177]、夜間に大垣城から石田三成方の兵が出てくることもあったと考えられる。牛牧村（「うしき村」）は大垣城から直線距離にして約6.2km（＝約一里半）であり、本田村（「ほんてん村」）は大垣城から直線距離にして約7.4km（＝約二里）である。よって、敵に包囲されていても大垣城から一里半～二里程度の距離は出撃可能であった、ということになる。

石田三成・小西行長・島津義弘・宇喜多秀家は連署して、８月27日に「はやしむら」（現岐阜県大垣市林町）に対して禁制を出し[178]、９月５日に赤坂西圓寺に対して禁制を出した[179]。また、石田三成・島津義弘は連署して、９月９日に加納村 （現岐阜県岐阜市加納）に対して禁制を出した[180]（表６参照）。これらの禁制を出した日付の時点では、これらの諸将は大垣城に籠城していた。上記の林村（「はやしむら」）は大垣城から直線距離にして約１km（＝約九町）であり、大垣城から近距離に位置しているので、場所的にいまだ大垣城の影響下にあると考えれば禁制を出したことは整合的に理解できる。しかし、上記の西圓寺が位置する赤坂は上述のように家康方の諸将が在陣しており、付城がつくられたと考えられる場所であるので、こうしたところに大垣城に籠城している諸将が連署して禁制を出したということは、大垣城籠城戦をめぐる戦局の行方がいまだ予断を許さない状況であったことを示している。岐阜城落城後であるにもかかわらず、上記の加納村に対して、石田三成・島津義弘が連署して禁制を出したことも同様の状況を示すものであろう。

家康は９月13日に岐阜へ着陣し[181]、同月14日には赤坂に出陣した[182]。翌日の９月15日に関ヶ原の戦いがおこなわれたが、その戦況の推移とその後の経過については、戦いの２日後にあたる９月17日付で石川康通・彦坂元正が連署して松平家乗に対して出した書状の内容に詳しい。

その連署書状の内容として、①去る（９月）14日（家康は）赤坂に着き、15日巳の刻（＝午前10時頃）、関ヶ原へ出陣して一戦に及んだ、②（前日の状況として）石田三成・島津義弘・小西行長・宇喜多秀家の４人は、（９月）14日の夜五ツ（＝午後８時頃）時分に大垣（城）の外曲輪を焼き払い、関ヶ原へ共に出陣した、③この地の衆である井伊直政・福島正則が先手として、そのほか（の諸将が）すべて次々と続き、敵が切所（＝要害の地）を守っているところへ出陣して戦いをまじえた時、小早川秀秋・脇坂安治・小川祐忠・祐滋父子の４人が（家康に）味方して裏切りをした、④そのため、敵は敗軍になり、追い討ち（＝追撃）により際限なく（敵を）討ち取った、⑤（討ち取った敵の）大将分は大谷吉

継・島津忠恒(ママ)（引用者注：島津忠恒は関ヶ原の戦いには参戦していないので、誤報である）・島左近・島津豊久・戸田勝成・平塚為広、このほかを討ち取った、⑥また、（９月）16日に佐和山城へ出陣して包囲し、田中吉政が水の手を取り、本丸を攻撃したので、石田正澄・朝成父子・石田三成の舅（しゅうと）父子（＝宇田頼忠・頼重）・石田三成親（＝石田正継）・妻子一人も残らず斬り殺し、天守に火を掛けてすべて焼き払い落城した、⑦その時、（佐和山）城から300人ほどが手前へ出てきたところを一人も残らず討ち取った、⑧石田三成は、15日の合戦場より、行方が今も聞こえない、⑨また、安国寺恵瓊を吉川広家・福原広俊の両人が（家康の）思し召しにより捕縛して出した、⑩毛利輝元は嘆願をしている、とのことであるが、どのようになるかわからない、⑪なお、変わったことがあれば、追々申し入れる予定である、と報じた[183]。

このように、９月15日の関ヶ原の戦いでの勝利と、９月16日の佐和山攻撃開始と落城[184]などについて報じている。関ヶ原の戦いの時刻について上記①では15日巳の刻（＝午前10時頃）としているが、これは家康がそれまでの陣所があった桃配山から前戦（＝陣場野）に本陣を移したことを指すのであろう。

開戦の時刻については15日未明とする史料があるが[185]、通説では午前８時頃に開戦したとしている。終戦の時刻は午の刻であった[186]。午の刻は、現在の時刻では昼の12時頃、或いは、午前11時から午後１時の間なので、遅くとも午後１時頃には決着がついたことがわかる。よって、戦闘は５時間程度で終わったことになる。

※以下、『史学論叢』42号（別府大学史学研究会、2012年）に続く。